

## オフィス鹿プロデュース「竹林の人々」

脚本 丸尾 丸一郎

### 【舞台】

主な舞台は、大阪の繁華街から車で30分ほど走った下町に建つ旧家「都築家」。母屋と離れが建ち、その間にトタン屋根の土間が広がっている。「都築家」の前は、堤防で囲まれたドブ川「天竺川」が流れている。

他、主人公・梅竹が通う高校「北谷高校」の教室・体育館など。

舞台中央、巨大なブラックボックスがある。ブラックボックスは光と影、心の鉛を表現するものである。ブラックボックスは回り、時には紙芝居のように一面が外れ、風景が描かれることとする。

### 【登場人物】

(都築家)

弟・都築梅竹 (17)

兄・都築松竹 (20)

父・都築竹重 (45)

母・都築杏子 (43)

(北谷高校)

工藤真理 (17)

岡本大輔 (17)

山浦 愛 (17)

町村遼平 (18)

魔物 (年齢不詳)

A子・B子・C子・町医者・救急隊員2名

## 【第一話 梅竹の独白】

明転すると、青年（梅竹）が白いチョークを持って立っている。

梅竹、黒い壁に落書きをしながら。（放課後、一人黒板で遊ぶように）

梅竹

僕は、僕である。いつの頃だったか、夜眠る前に、僕は僕であることを知った。突然の自我の目覚めは、どす黒い血の存在を僕に感じさせた。では、その僕とは一体誰なのか？

チョークは、人間の形を描いている。

梅竹

僕は「都築梅竹」である。大阪の下町に建つ旧家「都築家」の次男坊で、長い「都築家」の歴史の中の一人に過ぎない。僕の半分は父・竹重と母・杏子、多くの先人たちの血で出来ている。これは紛れもない、ただの事実や。では、残りの半分は何か？

人間の半分、チョークで塗り潰されている。

梅竹

それは外的環境によって、後から出来上がった僕だ。兄・松竹へのコンプレックス、人知れず恋愛してきたこと、自分の限界を知り曲がってしまった自分、生きることに息切れしている自分、ふとしたことで車に飛び込みたくなる自分、変わろうにも変われない。そんな鉛を取り除いて、ふわふわと夜空に浮かび上がりたいが、僕の半分がそれを否定する。つまり僕の中に、自由な僕などいない。僕は、空っぽの花びら。

人間の全部、チョークで塗り潰されている。

梅竹

こうやって描くことは、確認することだ。本当のことなんて、空っぽの僕には分からない。じゃあ、描くことに何の意味がある？ きっと、泣きたいんだ。ただみんなと泣いて共有したい。だってみんながみんな、空っぽで不安だろうから。

梅竹はチョークを捨て、ブラックボックスに駆け上る。

## 【第二話 堤防にて】

学制服姿の男子（岡本）・セーラー服姿の女子（山浦）、現れる。  
岡本と山浦はブラックボックスを回し、梅竹はその上を歩く。

岡本 陽が傾いた茜色の空の下、都築梅竹は大阪の下町を流れるドブ川の堤防沿いを  
せつせと歩いていった。

岡本・山浦 ドブ川の名は「天竺川」と言う。

山浦 土砂の蓄積により河床が周辺の平地より一段高くなっている天井川で、その両  
岸はコンクリートで固められ。

岡本・山浦 普段は死んだように濁った水が留まっている。

梅竹は立ち止まって、眼下（川）を見下ろす。

梅竹 僕は堤防に上って、このドブ川がなんで「天竺川」なんやとよく文句を言った。  
死んだ爺ちゃんや婆ちゃんやが、この川を泳いでるかと思ったら、泣けてくる。

岡本 しかし一旦雨が降れば、「天竺川」は様変わりする。

山浦 上流から逃げ場を失った雨水が雪崩れ込み、大蛇のうねりとなって氾濫を繰り返  
した。

洪水の音。背広を着た男（竹重）、現れる。

竹重 うちの地区は何度もそれを経験してきたんや。

岡本 とは、梅竹の父である都築竹重の口癖である。

竹重 この地区が水洗じゃなく、まだぼっとん便所やった頃、プカプカと浮かび上が  
ったうんこを掃除して回ったもんや。

梅竹 僕はその光景を想像して笑った。いつか洪水が起こればええ。全部洗いざらい  
流して、プカプカと笑いの種が浮かべええ。

竹重 しかし洪水の度、コンクリートの堤防は高く塗り固められ、この三十年、大蛇  
は一度も現れん。

竹重、ブラックボックスを回し始める。

岡本 その時、ぼつりと梅竹の肩口に狐の嫁入りの一粒が落ちた。

山浦 しかし、梅竹はそれを気にも留めず。

梅竹 天竺川をどこまでも行けば下流の神崎川、淀川に合流するはずや。海まで行っ  
たるか？（歩き続ける）

山浦 と、呟いた。

岡本 今すぐ堤防を降りて、あの重々しい「都築家」には帰りたくなかったし。  
山浦 それ以上に、破裂しそうな胸の動悸を何処かで静めたかった。  
岡本・山浦 なぜなら今日、梅竹はついに、あの工藤真里に告白したのだ。

チャイムの音。ブラックボックスが回ると、教室の風景が現れる。  
竹重の姿は消え、岡本と山浦は椅子を持ち出して上手下手に座る。

### 【第三話 告白】

教室。セーラー服姿の女子（工藤）、椅子に座って本を読んでいる。  
扉の開く音。梅竹、箒を持って教室に入る。

梅竹 （工藤を見て）……あ。

扉の閉まる音。梅竹は教室を出て、髪を弄りながらもじもじしている。

岡本 梅竹と工藤は小学校、中学と同じ学校で過ごし、今も同じ「北谷高校」に通う  
同級生だ。

山浦 梅竹の片思いの歴史は小学二年にまで遡る。鼻が低く縮れ髪の梅竹少年の前に、  
真っ黒で艶やかな髪を一つに束ねた工藤が転校して来たのだ。

梅竹 ……出来がちやう、画素がちやう……天使や。

岡本 （梅竹に）あれが、ポニーテールや。

梅竹 ポ、ポニー？ なんや、ポニーテールって？！

岡本 工藤の髪型。馬の尻尾にそっくりやから、ポニーテールって言うらしいで。

梅竹 そ、そんなわけ。

馬の嘶き「ヒヒーン」、駆け抜ける音「パカラッパカラッ」。

工藤、長い髪を揺らしている。

梅竹 確かに。血統のええ雌馬が、尻尾を振って歩いてるみたいや。

山浦 それから教科書越しに工藤を眺めることが梅竹少年の一番の楽しみとなり。

岡本 来る日も来る日も、工藤を横から斜めから見続けて早十年。

岡本・山浦 その時は、下校のチャイムと共に突然やって来た。

扉の開く音。梅竹は教室に入り、箒を置いて、机にある鞆を持つ。

工藤 (本を読むのを止め) 都築君、めずらしいやん。  
梅竹 つ、都築……。 (僕?)

山浦 十年間で、名馬を正面から見たのは初めてだった。

工藤 いつも掃除終わったら、すぐバスケ部の練習に体育館へ走っていきはるやろ?  
梅竹 ……ああ。今日はさぼったろうと思つて。

岡本 嘘付け。お世辞にも運動が出来る方でなかった梅竹は、クラブの先輩から怒られ続け、ほとほと疲れ果てていた。

工藤 なあ。一回聞いてみたかったんやけど、そのくるくるの髪、天然なん?

梅竹 天然っちゃあ、天然やな。パーマは当ててへん。

山浦 (転げて) なんなんだ、その答え?!

岡本 (山浦に) パンツ、パンツ!

山浦 (恥ずかしがって) いやーん。

工藤 ふうん……。 (本を読む)。

梅竹 ……。

岡本・山浦 途端、緊張で梅竹は呼吸の仕方を忘れてしまった。

岡本と山浦、「スーハー」と呼吸音を奏でる。

梅竹 (独り言で) 工藤の吐く神聖な空気を、僕なんか吸ってはなるまい。

岡本 そして息を吐き続けると、今度は象の寝息のような音を立てて腹一杯に空気を吸い込む。

梅竹 (凄まじい音を立てて吸う)

工藤 え? 都築君、大丈夫?!

梅竹 だ、大丈夫。(凄まじい音を立てて吸う)

山浦 静まり返った教室に、夜のサバンの如き時間がしばし流れたが。

梅竹 (大声で) このままでは死んでしまう!

工藤 何が?! 何で死んでしまうの?

岡本 頭を駆け巡る思考が自制心を飛び越え、それはまるで出会い頭の事故のように口から飛び出した。

交通事故の心象音。

梅竹 僕、工藤のことがずっと好きやつてん! 付き合ってくれへん?

工藤 ……付き合うって、何に付き合ったらええの?

梅竹 (小指を出し) 恋人、恋人!

工藤 君とうちが……。?!

梅竹　じ、事故とちやうで。ほんま。ほんまに十年前から、好きやってん。

工藤　十年前から……凄いやん。

梅竹　凄いやろ。凄いと思うで、この愛は。ほんま。

工藤　……少し、考えさせてもうてええ？

梅竹　全然ええで。返事はいつでも！

扉の閉まる音。梅竹、教室から飛び出る。

岡本と山浦がブラックボックスを回し始めると、教室の風景は消えていく。

梅竹　（震え）一丁前に告白してしもた。恐れ多くも工藤と付き合うやと？　でも、

岡本　万が一「ええよ」と返答された場合、十年越しの夢が叶うんや。

山浦　断じて期待してはいけないが、されど期待してしまう童貞青年の性。

岡本　結局、梅竹は教室から一度も振り返ることなく、ずんずん独りよがりな希望の闊歩を続けてきたのだ。

岡本・山浦　これが梅竹の動悸の理由であった。

梅竹はチョークを拾い、黒い壁に縦線を描き出す。

梅竹　気付けば、雨が堤防の下に建ち並ぶ家々の屋根を激しく叩き始めていた。

雨の音。梅竹、髪の毛を気にする。

岡本　雨を受けた梅竹の縮れ毛は、やはりくるくると螺旋を描き出す。

山浦　天然パーマのいつもと変わらぬ反応に、幾分冷静さを取り戻した梅竹は。

岡本・山浦　海までの青春一人旅を早々に諦め、家路を急いだ。

梅竹、駆け去る。岡本と山浦、椅子を持って上手下手へ去る。

#### 【第四話 都築家】

雨の音が続く。綺麗に着飾った女性（杏子）と竹重、現れる。

竹重と杏子、ブラックボックスを回しながら。

杏子　「都築家」は、天竺川の堤防下に建つ旧家だ。

竹重　祖父の代まで工務店を営んでいた関係で、日本家屋の二階家である母屋と別に離れがある。

杏子 伊丹空港の防音工事で、工務店が繁盛していた頃は数人の若い大工が寝泊りしていた離れだが。

竹重 梅竹にとっては、兄・松竹が逃げ込む場所である。

ブラックボックスの小窓より、男（松竹）が顔を覗かせる。

松竹 離れと母屋の間にはトタン屋根で被われた土間があり、二つの建物は薄暗い土間で隔たっているような、繋がっているような奇妙な関係を保ち続けている。

竹重と杏子、台詞の中の物を床に撒きながら。

竹重 今や、使われなくなった大工道具。

杏子 庭を手入れするための枝鋏み。

竹重 脚立、竹箒が乱雑に置かれている。

竹重・杏子 土間。

ブラックボックスの陰より、梅竹が現れる。竹重と杏子、上手下手へ去る。

松竹 堤防から表札の掛かる門への石段を下り、梅竹は離れを一瞥、小窓に灯りがついていることを確認すると、残りの数歩を進めて玄関の敷居をひよいと跨いだ。

古い時計の音。梅竹、静かに足を進める。

梅竹 何時からやろう、この家の空気が重く冷たいことに気付いたのは。築百年を超える家やから、長年の雨風に紛れて、得体の知れん魔物が住み着いているんやろか？ それとも松竹が離れに閉じ籠っているという狂った状況が、魔物を呼び寄せているんやろか？

松竹 父から鈍感な阿呆だと罵られ、幽霊やお化けの類を信じない梅竹でも、視線を感じることは多々あった。

梅竹 （ぶるつと震え）あかんあかん……工藤の顔を思い出せー。

松竹が小窓に消えると、工藤が現れる。「ヒヒーン」「パカラッパカラッ」。

工藤 （深いリバーブで）都築君。少し、考えさせてもうてええ？

梅竹 あー可愛かった！

梅竹、くしゃっと笑う。工藤が消えると、勝手口の閉まる音。

### 【第五話 魔物】

突然、梅竹の背後に汚れた黒い男（魔物）が現れる。

魔物

誰かが帰ってきた。陽の当たる場所から、いつものように見下ろしてやがる。だが、奴等は決して此処に下りて来ない。俺を恐れている。何故？ 俺を閉じ込めたのはお前等ではないか？

竹重と杏子、食卓を持って現れる。魔物、彼らの間を彷徨いながら。

魔物

俺の知る限り、この屋敷の住人たちは最低だ。一番偉そうにしている竹は、大工の跡取りになるはずが、先代が死ぬと下火であった店を早々に畳み、今では会計士と呼ばれる仕事をしている。無口で陰険な男だが、その巨体が長としての威厳を醸し出している。次に偉そうなのが杏だ。日中、家を切り盛りして、飯炊き、掃除、洗濯と忙しく動き回っている。時折尋ねてくる客人には愛想のいい女房を演じているが、如何なる時も化粧と白髪染めに手を抜かない自己顕示欲の強い女だ。

ブラックボックスの上より、松竹が食卓を覗いている。

魔物

三番目の松は俺を屋敷に招き入れた張本人で、それ故に俺は松を慕っていたが、ある頃を境に全くの別人に変わってしまった。近頃の松からは、血の匂いしかない。俺は屋敷で一番の平和主義者だから、もう松とは関わりたくない。

梅竹が駆けて来て、食卓につく。

魔物

一番マシなのが、梅だ。俺が住み始めた春に生まれた梅は、よく俺を見て笑った。そのくしゃくしゃの顔が好きだったが、大きくなるにつれて梅も俺の存在を頭から消そうとしている。梅にまで殺されたら、俺は何故此処にいる？ 誰かに認められてこそ生きているのだと確認できるのではないか？ 俺は、醜い老いぼれだ。日陰暮らしのせいで目はいかれ、耳も遠くなった。しかし、今日はやけに煩い。この音は、雨だ。

雨の音。魔物がブラックボックスに上ると、懐かしい日差しが差し込む。



魔物

母の背中を追って雑木林を駆け回っていた頃、よく遭遇した。雨の匂い、草花や土の匂い、母の匂い。しかし、母は俺を置き去りにしたつきり帰って来なかった。木陰に隠れ、空腹に耐え、どうしたら負け癖から抜け出せるのかと思案してみても、答えは出て来ない。当たり前だ。人生を選び取ることなど、最初から許されていないのだ。

松竹、魔物の前に現れる。

魔物

だが、松が優しく手を差し伸べてくれた時、俺は人生に一筋の光を見た。俺は松の腕にしがみつく。竹と杏のくれる飯に食らい付いた。最初は無邪気な俺を愛おしく見ていた奴等は、時が経つにつれ、卑しい者だと差別するようになる。我々と違うのだと解らしめるよう、俺をこの暗闇に閉じ込めた。

魔物、ブラックボックスから落ちる。勝手口の閉まる音。

魔物

お前等は騙し、此処に監禁したのだ。長い年月をかけ、この悲惨な運命を受け入れるようになった。俺は、愚かなお前等の行く末を見張り続ける。

魔物、物陰に隠れるようにブラックボックスを回し始める。

梅竹

(立ち上がり) ごちそうさん。

小窓から、松竹が顔を覗かせる。

松竹

(小声で) 梅竹、梅竹。久し振りに俺の部屋に来えへんか？

梅竹

……別にええけど。

ブラックボックスが回ると、離れの中の風景が現れる。

魔物は消え、竹重と杏子は食卓を持って上手下手へ去る。

## 【第六話 松竹の憂鬱】

小さな勉強机、ブラウン管のテレビ、漫画が散乱する部屋。テレビゲームの音。松竹、ゲームに勤しんでいる。

松竹 ついに最終ステージに突入したから、お前にエンディング見せたらうと思って。誰も頼んでへんし……なあ、松竹。

松竹 (テレビゲームに夢中で) やべ！ ぬおっ！ ガハ！

梅竹 なんて松竹は、松竹なんや？

松竹 シェークスピアみたいなことぬかすな。恋でもしたか？

梅竹 えええ？！

松竹 ロミオとジュリエット。俺に聞かんと、どこぞのジュリエットに聞け。

梅竹 違う。僕が聞きたいのは、なんで兄弟やのにこんなにも違うかってこと。半分

は一緒のはずやろ。

松竹 ぱーどうん？！

梅竹 僕の髪はチリチリで、松竹は憧れの直毛。真横に引かれた太い眉。ぱっちり二

重に、鼻筋の通った顔。

松竹 お前、気持ち悪い。

梅竹 ずっと思ってたん。松竹の顔は、時代劇スターみたいやって。

音楽。町娘 (※工藤と同じ役者が演じる)、悲鳴を上げて逃げて来る。

悪代官 (※岡本と同じ役者が演じる)、追い駆けて来る。

悪代官 町娘、よいではないか？ よいではないか？

町娘 後生でございます！ 人を呼びますよ。いえ、舌を噛みます。

松竹、刀を持って立ち上がる。

松竹 (臭い芝居で) 一つ。人の世、生き血をすすり。二つ。不埒な悪行三昧。三つ。

醜い浮世の鬼を、退治してくれよう桃太郎。

梅竹 えっほ、えっほ。僕はよくて駕籠屋や。いずれは成敗される悪代官を運ぶ。

松竹、悪代官を成敗する。

梅竹 ひえー。(悪代官を運び) えっほ、えっほ。

松竹 (町娘を抱きながら) そうかなー。俺、高橋英樹かなー。

梅竹 (戻って) いや、この癖っ毛では鬻さえ結えん。僕はふかし芋片手に、テレビ

でスターを応援する私設応援団が関の山や。(ふかし芋を食べ) よっ、松の字！

松竹 そうかなー。俺、松方弘樹かなー。

梅竹 なんて？ なんて松竹は、松竹なんや！

町娘 (素に戻って) お疲れ様でしたー。

町娘が去ると、現実へ。

松竹 ……松竹。竹重より立派になるよう宿命づけられた名前も辛いぞ。

梅竹 梅竹よりマシや。松竹梅の一番下やぞ。

松竹 いや、梅の方がいい。

梅竹 松の方がええ！

松竹 梅がいい！

梅竹 容姿端麗、頭もキレて、神童現れたりと近所の奥様方の話題を総ざらいにして聞いてたぞ。縮れ毛でちんくりんの僕が生まれたことなんか、松竹の付録みたいなもんや。不本意やけど、僕はこのいかんともし難い事実を受け入れてきた。例えば、キャッチボール！

竹重、現れる。松竹がボールを投げると、竹重のミットに吸い込まれる。

竹重 ナイスボール！

梅竹 松竹が投げたボールは爽快な音を立ててミットに吸い込まれるのに、僕が陸に飛び出たドジョウのようなフォームで投げたボールは……。

梅竹が投げると、ボールは明後日の方向（客席）へ飛んでいく。

竹重 梅竹、どないやったら、そうなって、こうなんねん！

竹重、ボールを拾いに客席へ降りていく。

梅竹 おとんに球拾いに行かせるのが申し訳なくて、僕は投げることを止めたんや。

松竹 でも一度だけ、その立ち位置に抵抗したことがあった。

梅竹 え？

松竹 自転車。俺が買ってもらった新型の赤いモトクロスを羨ましがって。

音楽。梅竹と松竹は自転車に跨って、必死に漕ぎ始める。

梅竹 僕は悔しさを紛らわすため、補助輪のついた愛車を必死に漕いでいた！

松竹 俺はガラガラと無駄な音を鳴らす、弟を追い駆けた！

梅竹 いつもなら兄に道を譲る僕が、この日は違った。スピードで勝てないなら。

梅竹、蛇行運転を始める。

松竹　梅竹の奴、蛇行運転で行く手を阻む気か？　一気に抜く！

松竹は蛇行運転しながら、抜こうとする。

松竹・梅竹　その時、赤いモトクロスの前輪が補助輪に乗り上げた。

松竹と梅竹、悲鳴を上げながらスローモーションで転げ回る。

「ガシヤン」と自転車の倒れる音。竹重、現れる。

竹重　梅竹、なんで松竹の邪魔をしたんや？　（頭を殴る）

梅竹　痛てっ……タイヤがひん曲がり、一日にして自転車屋に戻る羽目になった赤いモトクロスを前に、僕は自分の立ち位置を理解したわ。

松竹　同時に、俺は親の期待に応え続ける運命を受け入れたで。

杏子、現れる。

杏子　松竹、勉強の時間よ。早よ座って。

松竹、勉強机に座る。

松竹　ドリルや！　漢字ドリル、計算ドリル、全部持って来い！

杏子と竹重、本を積み上げていく。

松竹　（勉強をしながら）梅竹、一日十二時間勉強したことがあるか？　もはや無我の境地。比叡山の坊さんでも、もうちょつと遊んどるで。さぼれば怒られ、橋に括り付けられる。学校が終わると杏子が車で待ってて、進学塾へ連れられる。窓から見える夕陽がトラウマで、未だに夕陽を見ると無条件に涙が零れる。なまじ賢かったから、親の夢は広がり続ける。中三の夏、俺は家出を決行する。

松竹は本を崩し、立ち上がる。

松竹　ポケットにあった50円玉を握り締め、塾から逃げ出した！

松竹、離れの外に飛び出す。お菓子屋の前の風景。

松竹 当時流行っていたチェッカーズの「涙のリクエスト」を歌いながら、ガリガリ君を買って食う、束の間の自由。(ガリガリ君を食いながら、チェッカーズ「涙のリクエスト」を口ずさむ)

梅竹 二時間後。おとんとおかんに見つかって、松竹は土間に括り付けられた。

竹重と杏子、松竹を柱に括り付ける。

梅竹 土間から聞こえるチェッカーズが、「素直にI, m Sorry」に変わったも  
んやから。

松竹 (チェッカーズ「素直にI, m Sorry」を口ずさむ)

梅竹 僕はほっと胸を撫で下ろしたのに……松竹は夜中に脱走を図り、カッターで小指を切り落とした。

松竹の悲鳴。救急車の音。竹重と杏子、松竹を連れ去る。

梅竹 「松竹小指喪失事件」は十二歳だった僕に、いつか兄が手の届かない場所へ逃げ出すことを予感させた。それは半年後に的中する。確実視されていた神戸の進学校への受験に失敗し、挫折を味わった松竹が激変したのである。

離れの中。テレビゲームの音。松竹、ゲームに勤しんでいる。

梅竹 あの時、わざと受験に失敗したやろ？

松竹 わざと違う。

梅竹 いや、わざとや。親の期待から転げ落ち、逃げ出す算段やった。

松竹 俺よりアホやった、山田君がな。

梅竹 突然の山田、誰？！

松竹 慶応大学の医学部に進んだらしい。山田君の妹は障害を持っていたから、山田君には勉強する必然があった。でも俺には無い。その差やろ？

梅竹 ……

松竹 だから浪人生に身をやつした俺は、勉強よりもまず包茎手術に踏み切った。

梅竹 その振り幅にも嫉妬したけど！ どうやった？

松竹 めっちゃ大変！ 医者からしばらくは大きくすんなって注意されたけど、勃つ時は勃つやろ。朝起きてパンツが血まみれやった時、失神しかけたわ。おっ、クリアーしたぞ。

テレビゲームの音、エンディングBGMへ変わる。

梅竹 このタイミングで?! 不自由な小指を補う集中力、すげー。

松竹 (笑って) お前も早く手術しろよ。

梅竹 いや。僕、包茎ちゃうし。

松竹 ……。

梅竹 それに、まだ彼女ができると決まったわけとちゃう。(髪を整える)

松竹 謙遜すんな。一刻も早く女を抱いた方がいいぞ。0と1は違う!

松竹は立ち上がり、ブラックボックスを駆け上る。

梅竹

確かに。包茎手術に成功した松竹は、男になった自信を身に纏い、勇ましく行動を開始した。下町に似つかわしくない容姿と囁きで、次々と女子を手中に収めていったのだ。

ブラックボックスの上、A子(※工藤と同じ役者が演じること)が現れる。

松竹 いい女が歩いてると思ったら、お前だった。

A子 ……え?

松竹 君って強く見えるけど、本当は弱いんだろ? 最近、弱音吐いてるか?

A子、松竹に抱きつく。B子(※山浦と同じ役者が演じること)が現れる。

松竹 どうして、そんなに俺の好きな顔に生まれてきたの? 俺にしとけば?

B子 い、いや……。

松竹 彼氏はあるの? いたとして、奪うだけだよ。

B子、松竹に抱きつく。梅竹、双眼鏡で覗いている。

梅竹

僕は、夜な夜な公園で逢引している兄を目撃しては杏子に報告した。兄にしか興味を持たぬ母に振り向いて欲しかった。次第に母は尾行を命じるようになる。しかし母が指示していることを知った日、松竹は暴れ馬となった。

杏子が現れ、松竹はブラックボックスから飛び降りる。A子とB子、去る。

松竹 (チェッカーズ「ギザギザハートの子守唄」を口ずさむ)

梅竹 チェッカーズの「ギザギザハートの子守唄」を口ずさみながら。

松竹 (チェッカーズ「ギザギザハートの子守唄」のサビを叫ぶ)

競馬G1レースのファンファーレ演奏。ゲートの開く音。

松竹は駆け出し、杏子に掴み掛かる。

松竹 ババア、何さらしとんじゃ！ 金や。賠償金、払わんかい！

松竹は杏子の財布を奪って、逃亡する。

杏子 ヤクザか！ あんたみたいな奴は、ヤクザになれ！

梅竹 と言いつつ、杏子は松竹の女の所在を突き止めては、我が子の将来のため別れるように頼み込む。

松竹は戻ってきて、杏子に掴み掛かる。

松竹 ヤクザになんかなれるか！ 俺は弱い者に強く、強い者に弱いんじゃない！

梅竹 繰り返される「都築家」の泥試合。それに終止符を打ったのが、竹重であった。

竹重が現れ、土間にある大工道具で松竹を懲らしめる。

竹重 もう大人しくするか？ するか？！

竹重は返事を待たず、松竹を痛め続ける。

梅竹 父の怖い程の非情さを知った松竹は離れへ逃げ籠るようになり、数ヶ月に一度、

金に困って暴れ馬に化ける以外、姿を見せることは滅多に無くなった。

竹重と杏子が去ると、離れの中で松竹が横になっている。

梅竹 ……松竹は、なんで松竹なんや？

松竹 知るか、ボケ。

梅竹 ほんで僕は、なんで梅竹なんや？ いつも蚊帳の外。縮れ髪、平たい顔、小さ

な体、都築家の者に相応しくないわ。

松竹 ……。

梅竹 僕、ほんまの子供とちゃうかもしれん。僕は一体、誰や？

竹重、現れる。

竹重 梅竹、いつまでゲームしとるんや。風呂を沸かさんかい。

梅竹 す、すぐ行くー。

梅竹が立ち上がると、松竹は微笑んで。

松竹 梅竹、彼女ができるとええな？

梅竹は頷き、離れを出る。勝手口の閉まる音。

### 【第七話 炎】

魔物、ブラックボックスを回しながら現れる。離れの中の風景、消えていく。

魔物 梅がいつものように風呂を沸かして土間へやって来た。竈の中に新聞紙を丸めて入れると、その上に細い薪を丁寧に積み上げ、五本目のマッチでやっと火を

付ける。ここまでの手つきで、奴がどんなに臆病だか分かる。

梅竹は竈の中で火を起こし、団扇で扇いでいる。

魔物 俺は梅の丁寧な仕事によって火が起こる様を見るのが好きだ。此処に唯一灯り

がともる時であり、俺と梅が過ごす貴重な時間だから。しかし梅はこちらを窺い、酷く警戒している。松が事件を起したあの夜からだ。

柱に括り付けられた松竹、現れる。

魔物 昔、俺は間近で見ていた。松は強情に謝らず、トタン屋根に差し込む月を見て

いた。しかし月が通り過ぎ、暗闇に包まれると、松は足をバタバタさせて怯え出した。

魔物、松竹に駆け寄る。

魔物 俺が此処にいるぞと合図を出したが、松は拒否して暴れ出す。そして松の足は



大工の道具袋を捉え、器用にそれを引っくり返した。狙いをつけたのは、錆びたカッターナイフだった。松は後ろ手で拾い上げ、刃を出して縄を切り始めた。

松竹、カッターナイフで縄を切り始める。

魔物

違う、それはお前の指だ！ 俺は声を張り上げたが、松は聞く耳を持たず、縛られて感覚の消えた小指を切り続ける。

松竹

(悲鳴を上げる)

魔物

松の小指からは赤い血がどっと溢れ出している。俺は止めようと必死に舐めたが、その俺の口には千切れた松の指があった。

魔物、小指を咥えている。竹重と杏子、駆けて来る。

杏子

松竹、あんた何してんの？！

竹重

き、救急車を呼べ！

竹重が魔物を殴ると、魔物の口から小指が落ちる。

魔物

(ふらつきながら) 違う、俺がやったんじゃない！

竹重

梅竹、救急車を呼んでくれ！

魔物

そう、梅だ。一部始終を勝手口から覗いていた梅が証明してくれる。

梅竹

(微笑んでいる)

魔物

…梅は微かに笑っていた。

梅竹

う、うん。救急車や。

魔物

一瞬戸惑いこそしたが、俺はすぐ微笑みの意味を理解した。

救急車の音。松竹・竹重・杏子、消えていく。

魔物

梅は松との差を痛感する度、いつも俺の所へやって来た。

梅竹

なんでやる？ なんでこうも違うんや。

魔物

そう愚痴を零した。

梅竹

兄ちゃんは完璧や。一生、勝たれへんわ。

魔物

完璧なはずの松が小指を切り落とすという失敗を犯したのを見て、梅は安心したのだ。それを屋敷の中でただ一人解り得た俺は、梅に一層の親しみを覚えた。

梅は俺と同様に卑しく、負け癖の染み付いた人間だ。

炎の燃える音。梅竹、竈を見つめている。

魔物

しかしこの夜以来、風呂を沸かす時を除いて、梅は土間へ立ち入ろうとしない。暗闇の中で卑しさを思い出し、愚かな自分と対峙することを拒否している。それを恐怖だと勘違いしている。梅、目を覚ませ。お前も閉じ込められている。家族という鎖で繋がれ、一生抜け出せない。だから此処で、俺と話をしよう。

魔物がブラックボックスを回すと、教室の風景が現れる。

### 【第八話 梅竹の過ち】

雨の音。教室の中、工藤が座って教科書を読んでいる。

岡本と山浦、上手下手より現れる。

岡本

次の朝、雨はまだしとしと降り続いていた。

山浦

梅竹の髪は湿気のせいで在るべき所に納まらず、朝靄のようにふわふわと逆立っていた。

梅竹、髪を必死で撫でつけながら。

梅竹

ちくしょう！ 梅竹よ、如何なる時も平常心を持って！

「ヒヒーン」「パカラッパカラッ」。工藤、長い髪を揺らす。

岡本

工藤はいつもと変わらず、艶やかな尻尾を垂らしている。

扉の開く音。梅竹、教室に入る。

山浦

梅竹は流れるような動作で教科書を開いて、工藤を眺めてみた。

梅竹

（教科書を開き）なんでやろ？ 僕と工藤は運命の手綱で繋がっているような気がする。

岡本・山浦

梅竹は兄の真似をして、男前に笑った。

梅竹、笑う。チャイムの音。

梅竹

（大きな独り言で）よし、バスケット部の練習に行こう！ 忙しい忙しい！

梅竹、教室から飛び出る。山浦、ブラックボックスを回しながら。

山浦 梅竹はわざと工藤には目もくれず。  
工藤・山浦 体育館に向かって駆け急いだ。

教室の風景は消え、工藤と山浦は消える。

梅竹は学ランを脱ぎ、タンクトップとハーフパンツに着替えている。

岡本 (着替えながら) 都築、今日は珍しく早いな。

梅竹 そうか？ 岡本。僕、いつもとなんか違わへん？

岡本 ……タンクトップがでかすぎる。短パン、腰で履きすぎやろ？

梅竹 やっぱりそう思う?! N B Aの選手みたいやって。今日こそ、ダンクできそうな気がするわ。

岡本 チビのくせに。

梅竹 めっちゃチビがチビにチビって言うた、めっちゃチビが。

岡本 俺はいいの。ポイントガードやから。パスを回すのが仕事で、二年生ですでレギュラーやし。

梅竹 ……(落ち込む)。

岡本 落ち込むなって。お前は補欠がよく似合ってる。

梅竹 今はな。ただ、のびしろがある。スターになるのびしろが！

岡本 あ、そうそう。真里ちゃん、俺んどこ相談しに来たぞ。

梅竹 え？

岡本 (神妙な顔で) 都築。お前、真里ちゃんに告白したらしいやんけ。めっちゃ戸惑ってたぞ、あいつ。

梅竹 な、なんで岡本に……そして、お前は工藤に何と言ったのだ！

岡本 ……。

梅竹 ごめん、独り言や。ただの。

岡本 俺は都築とは友達やし、一応フォローしといたけど。どうやるな？

梅竹 (リストバンドで汗を拭いながら) く、工藤、別嬪さんやろ？ どうせ、つ、つ、付き合うなら、く、工藤ぐらい狙わんな。お、男が廃る。

岡本 (笑って) その心意気！ でも真里ちゃん、町村先輩の女やからな！。

梅竹 ……ばーどうん?!

バスケットボールが転がってくる。町村、駆けて来る。

町村　ごめんごめん。ドリブルが勢い余っちゃって。

岡本　町村先輩！（ボールを渡す）

町村　どうした、岡本、都築。汗をかいてないぞ。噴水のように全力で汗をかけ！

岡本　はい！

町村　岡本、練習に付き合え！

町村と岡本、バスケットボールを取り合う。

ブラックボックスを回しながら、工藤が現れる。

工藤　町村遼平はバスケットボール部のキャプテンでエース、梅竹から見れば雲の上のお方である。

町村、ドリブルシュートを決める。

町村　岡本、俺はペガサスのようか？

岡本　はい、ペガサスみたいっす！

山浦が現れ、工藤と声援を送る。

工藤・山浦　町村先輩、ナイッシュー。

町村　（ボールを渡して）都築は壁に向かって、一人ドリブルだ！

梅竹、頭を抱えて蹲る。

山浦　梅竹の頭上を、名馬とペガサスが絡まり合って飛んでゆく。

工藤　その日の練習、梅竹はコートを踊るように飛び跳ねる町村先輩を見つめながら、自分と彼の違いについて考え続けた。

町村と岡本はバスケットボールを続け、工藤と山浦は声援を送っている。

梅竹、一人ドリブル練習をしながら。

梅竹　生まれながらにして陽の当たる人と当たらない人とは、いかんともし難い差があつて、両者の間には日本海峽よりも深い谷がある。飛び越えようとしてもそれは叶わぬ夢や。僕が高く飛ぼうとしても、あのゴールには届かへん！

梅竹はドリブルを止め、リストバンドで涙を拭う。

梅竹

このリストバンドは、断じてこんなものを拭うために装着してたわけとちやう。物心ついた時から、分かってたはずや！ 都築家の歴史書、キャッチボール、赤いモトクロス。痛いほど理解してたのに、なんで同じ過ちを繰り返した？！

梅竹、バスケットボールを地面に投げつける。

光と影の世界。梅竹はユニフォームを脱ぎ、着替え出す。

町村・岡本・工藤・山浦は「心の声」を発しながら、ブラックボックスを回す。

心の声

梅竹は立ち位置をわきまえずに、一瞬でも人より高く飛ぼうとした己を恥じた。地を這う尺取虫が、胸を高鳴らせ、天高いゴールを期待してしまったことが憎かった。

梅竹、雄叫びをあげて踊り出す。

過ちを悔いるように、自分自身を嘆くように、地団駄を踏む。

届かないもの向かつては飛び上がり、壁にぶつかり続ける。

町村・岡本・工藤・山浦、梅竹の鼓動の音に合わせて踊り出す。

光と影、色のない世界。伸びる梅竹の影。梅竹は何度も倒れ、何度も立ち上がる。

町村・岡本・工藤・山浦、そんな梅竹を見下ろしている。

梅竹がブラックボックスに駆け上ると、大雨の音。

梅竹

金や。賠償金、払わんかい！

竹重と杏子が現れ、ブラックボックスを回す。梅竹、その上を歩く。

竹重・杏子 暴れ馬の真似事を繰り返し、梅竹は傘も差さずに堤防沿いを歩いている。

梅竹 ヤクザになんかなれるか！

竹重・杏子 しかし、梅竹には暴れ馬になる才覚も度胸もない。

梅竹 俺は弱い者に強く、強い者に弱いんじゃ！

竹重・杏子 しかも梅竹の場合、加害者も被害者も己自身である。己の過ちに腹を立てているのだから。

激流が流れる音。ブラックボックスは止まる。

梅竹

(見下ろし) 天竺川は大蛇のうねりとなって、隆々たる流れを誇っている。

竹重・杏子 梅竹の縮れ髪も、大蛇のごとくうねり出していた。

梅竹 子供の頃から嵐になると堤防に駆け出し、このどっぷりした流れを見ては、胸が熱くなった。

竹重・杏子 そして今、コンクリートに打ちつける濁った水は、梅竹の堤防を破壊しようとしていた。

梅竹 金や。賠償金、払わんかい！

竹重・杏子 と叫んで、何かを蹴った！

梅竹がブラックボックスを飛び降りると、衝撃音が響く。

### 【第九話 秘密の作業】

竹重と杏子が去ると、魔物が駆け出る。

魔物 俺は慌てて飛び起きた。脇腹の辺りに、鈍い痛みがじんじんと響いている。

荒い息のまま、梅竹は魔物に近寄っていく。

魔物 ……梅？

梅竹 ば、賠償金！

梅竹、魔物を蹴る。魔物は転げ回る。

魔物 梅が帰ってきた。俺の梅が！

魔物は梅竹の足にしがみ付くが、梅竹は振り払うように蹴り続ける。

魔物 これは俺たちの秘密の作業だ。梅は自分を見失いそうになると、此処へやって来て、立ち位置を確認する。埋まらない松との差、振り向かない杏、絶対的であるとする竹、そんな境遇に閉じ込められた梅。最初は愚痴が、体が大きくなるにつれて、吸い込む濁った空気も膨らんだ。髪を掴んで引っ張ったり、殴る蹴る。俺は耐え続けた。嬉しかったから。

梅竹は膝から崩れ、地面の砂を掴む。

魔物がブラックボックスに駆け上ると、懐かしい日差しが差し込む。

魔物 雑木林で松に拾われた時、初めて温もりを知った。でも、それは孤独への一歩

だ。結局は皆、自分のことだけに夢中になり俺を手放していく。杏の運ぶ飯によつて、俺は生かされているが生きていない。梅との作業だけが、生きていることを実感できる時間だ。

梅竹、土間で暴れる。魔物は梅竹に歩み寄り、すがり付く。

魔物

お前は俺より下で生きている。一生暗闇から抜け出せない。そう言つて見下ろす梅は、同時に泣いていた。だから俺は、梅の吐く濁った息を腹一杯に吸い込んでやる。俺がいないと梅は自分を見失い、梅がいないと俺は消えてしまう。二人は生きる苦悩を共有してきた。松の小指と共に失われていた時が戻ってきたから、俺は嬉しいし、殴られても、吠えたり噛み付いたりしない。

魔物、疲れたように梅竹の膝で眠る。犬の遠吠えの声。

梅竹

僕は土間に繋がれてる生物が、何か知らなかった。家族が「イヌ」と呼ぶから、それが名前だと思ひ込んでた。「イヌ」が生物の種類を表す言葉で、散歩したり、風呂に入れたりすると聞いた時、驚いた。僕にとってイヌは土間にいる毛むくじやらの塊で、断じて愛でる対象ではなかったから。

松竹・竹重・杏子、食卓を持って現れる。

梅竹

一度だけ聞いたことがある。なあ、なんでイヌはずっと土間に繋がれてるん？

松竹・竹重・杏子は食卓に座つて、梅竹を見下ろす。

梅竹

冷ややかな目で僕を責めた。当然や。その答えこそ、目を背けたい「都築家」の本質。拾ってきたイヌを愛することも捨てることもできず、土間に放置し続ける。イヌの存在は自分たちの足りない人格に触れるようなもんやったから。

松竹・竹重・杏子は食事を始め、梅竹は魔物（イヌ）の頭を撫でる。

梅竹

……可哀想に。

イヌ

梅、そんな言葉いらぬ。

梅竹

臭い。汚いな。お前がこの家の重々しい空気を作り出しているんや！

梅竹、イヌを掴み上げる。

梅竹 お前が土間に居座るせいで、家族と兄ちゃんは遠ざかってしまった。

松竹・竹重・杏子は食卓を持って、三々五々に去る。

梅竹

俺はお前なんかとちやう！ お前のような生き方はまっぴら御免やし、負け犬の匂いが染み付くから、土間を避けてたのに……ちくしょう！ なんで工藤に告白した？！ 身の丈をわきまえずに恥をかけた。俺のアホ、アホ！

梅竹がイヌを踏みつけていると、離れの扉が開く。

音楽。刀を持った松竹、現れる。

梅竹

あ……（足を解き）ち、違う。可愛がってただけや。誤解せんと。

松竹

（刀を放り投げ）梅竹、一緒に堤防まで行かへんか？

梅竹

え、ええけど……。

松竹はブラックボックスを駆け上り、梅竹は松竹を追い駆ける。

### 【第十話 再戦】

激しい雨の音。イヌ、ゆっくり体を起こして。

イヌ

どれくらい時間が経過しただろう。松竹と梅竹は傘も差さず、天竺川の水位を見守っていた。

激流の流れる音。イヌ、痛む体を引き摺って去る。

梅竹

堤防まであと一メートル。過去最高かな？

松竹

どうやろ？ 雨、もつと降れ！ 川、堤防を越えろ！

梅竹

……松竹もそう思うんや？

松竹

梅竹もそう思うか？

梅竹

こ、興奮する。いつか見てみたいわ、濁った水が壁を乗り越えるところ。

松竹

……俺も。

梅竹

全部洗いざらい流して、笑いの種よ、浮かび上がれ！

松竹

（笑って）なんや、それ？

梅竹

知らん？ 昔、氾濫した時に、おとんがうんこ掃除して回ったって話。



松竹 ……そう。(拳を握る) 親父、女がいるみたいや。  
梅竹 ふあい?!  
松竹 俺の友達が……友達って言うても、山田君の友達やけど。  
梅竹 また山田が出てきた!  
松竹 会計事務所の近くで、助手席に若い女を乗せてラブホに入る親父を見たらしい。  
梅竹 え……見間違いやろ? 定時に出て定時に帰る、あの堅物に限って。  
松竹 分からんぞ。俺らの知る竹重は家にいる竹重だけで、竹重のごく一部や。  
梅竹 ……確かに。

激流の中、竹重が縮れ毛の女と歩く妄想風景。

梅竹 おとんに遊び人の顔があるとすれば、全て合点がいく。おかん以外の女と肉  
松竹 関係を結び、それが鼻べちゃで縮れ毛の女やったら。  
梅竹 ばーどうん?!  
松竹 僕、愛人の息子かもしれん。いよいよ現実味を帯びてきた! 新しいお母さん  
梅竹 が迎えに来た時、おかん引き止めてくれるかな? 玄関先で三つ指ついて「ど  
松竹 うぞどうぞ」なんてこと。  
梅竹 (笑って) 梅竹の髪が、くるくる回り始めたぞ!

梅竹の妄想風景、消える。

梅竹 人事やと思つて。僕にとっては、半分を失う一大事や。  
松竹 で、梅竹はどう思う?  
梅竹 え……絶対に許されへんことやと思う。  
松竹 そうやんな? 恐れるに足らん。親父もただの男やった!  
松竹 松竹、ブラックボックスから飛び降りる。杏子、現れる。  
松竹 競馬G1レースのファンファーレ演奏。ゲートの開く音。  
松竹 松竹は駆け出し、杏子に掴み掛かる。

松竹 金や。賠償金、払わんかい!  
梅竹 兄ちゃん?!

梅竹、ブラックボックスを駆け下りる。

杏子 何もしてへんのに、なんで金を渡さんとあかんのよ!

梅竹　　なんで暴れ馬に？

松竹　　金がいる！　金をよこせ！

松竹は杏子に掴み掛かり、財布を奪おうとする。

杏子　　もうやめて！　梅竹、助けて！

梅竹、怯えながら見ている。松竹、抵抗する杏子の太股を蹴る。

松竹　　（財布を取り上げ）返して欲しければ、離れに來い。そう竹重に伝えよ！

松竹、扉より離れに入る。杏子、崩れ落ちて。

杏子　　（泣き）やっと大人しくなったと思ったのに。あんな奴、死んだらええねん！

梅竹　　……か、関係のない家族の泥試合や。僕にはもつと切実な問題がある。

梅竹は髪を掻きながら、駆け去る。車の停車する音。

ブラックボックスの影より、イヌが現れる。

イヌ　　車のエンジン音が止んだ。竹が帰ってくる合図だ。

竹重が現れ、杏子を起こす。

イヌ　　いつものように俺に見向きもせず母屋へ入った竹が、土間へ引き返してきた。

竹重は杏子を母屋へ去らせて、イヌに近寄る。

イヌ　　俺は咄嗟に身構えたが、竹は鼻先をかすめて歩くと。

竹重　　（扉を叩き）松竹、おるんやろ？　出て来んかい！

イヌ　　……竹が、松の名を呼ぶのを見たのは何時振りだろう。

扉が開き、松竹が現れる。

竹重　　お前、杏子に何をした？

松竹　　お前が悪いんやろ！　俺と勝負しろ！

竹重は背広を脱ぎ、丁寧に置く。

松竹

あの時は負けたが、俺ももう男や。お前なんかには負けるか！

競馬G1レースのファンファーレ演奏。

突然、竹重は松竹の腹を蹴る。松竹、呼吸ができず苦しむ。

竹重

離れに逃げ籠つとる奴の、どこが男や！

竹重、松竹を掴み上げる。

松竹

放せ、放せよ！

イヌ

土間に鈍い音がこえました！

竹重、松竹を殴る。松竹、ふらふらと倒れ込む。

イヌ

竹が顔面を殴った。松は拳を振り上げるが、竹は膝でおさえ込み、尚も殴り続ける。平和主義者の俺が大声で仲裁に入るが、二人の耳には届かない。

竹重、馬乗りになって殴る。杏子、駆けて来る。

杏子

お父さん、もうやめて！

竹重

松竹、なんやその目は？！ (殴る)

松竹

ま、負けへんぞ！

竹重

まだやるんか！ (殴る)

杏子

やめてって！ (泣き出す)

竹重は殴り続け、杏子は泣き続ける。

イヌ

呆れたものだ。屋敷の住人たちは争う事が好きなのだ。傍にいる温もりでは足らず、ぶつかり合って熱を起こそうとする。贅沢だと思う。俺たちは生きるために争っても、確かめ合うために傷付いたりしない。

突然、静まり返る。松竹は力なく横たわり、竹重は背広を拾って去る。

杏子、自分の上着を松竹にかけて、竹重を追い駆けて去る。

イヌ 松は黙って、トタン屋根から差し込む月明かりを見ていた。静かだ。何時からだろう？ 雨は止んでいた。

梅竹、そろりと現れる。

梅竹 正義のヒーローにでもなろうとしたんか？

松竹 ……。

梅竹 浮気の事も問いたせんと、松竹こそただの男やった。

松竹 ……俺はもう松竹ちやう。都築であることを捨てる。

松竹、ふらふらと離れへ入る。梅竹、月明かりを見上げる。

イヌ

梅は、あの夜と同じように微笑んでいた。もしかして梅は松との差を埋め、俺を置いて土間から這い出そうとしているのかも知れない。だとすれば、暗闇で存在を確かめ合ってきた俺たちの別れも遠くない内にやって来るだろう。なんだか疲れちまった……。

イヌ、横になる。梅竹とイヌを月明かりが照らす。

### 【第十一話 夏】

蝉の声。岡本と山浦が現れ、ブラックボックスを回しながら。

岡本 長い雨が止み、蝉の声が煩わしい季節がやって来た。

山浦 「北谷高校」には、幾分髪が伸びてぐるぐると渦を巻いた梅竹の姿があった。

梅竹が立ち上がると、イヌは去る。教室の中、工藤が本を読んでいる。扉の開く音。梅竹は教室に入ると、席に座る。

岡本 席に座って教科書を開き、工藤を眺める代わりに、難しい漢字が隊列を成す古文に目をやる。

梅竹 (棒読みで) ゆく川の流れば絶えず、しかも、もとの水にあらず。よどみに浮かぶうたかたは、かつ消えかつ結びて、久しくとどまりたるためしなし。

山浦 梅竹にとって、それがどんなに歴史的名文であろうが関係ない。

梅竹 世の中にある人とすみかと、またかくのごとし。

岡本 工藤に目を奪われないための最善の策として、ひたすら漢字を追うだけだ。

梅竹 全く分からん。が、何やらええ事を言ってる気配がする！ 「方丈記」 鴨長明

(かもちようあきら)、やりおるわ。

山浦 梅竹は、残りの高校生活をそうやってやり過ごそうと腹を括っているのだ。

岡本 数日前の放課後、工藤は梅竹を呼び出した。

チャイムの音。教室の中、梅竹・工藤・山浦がいる。沈黙が続く。

工藤 ……(小声で)あ、愛ちゃん。おしっこ行きたくなってきた。

山浦 ちゃんといいや。真里ちゃん、しつかり。

工藤 ……都築君。あんな、あんな……。

梅竹 え、どうしたん、どうしたん？ なんで涙目？ 相談か？ 僕でよろしければ！

工藤 いや、ちやうくて……。

梅竹 最近バスケット部のマネージャーになりはったから、その悩みかな？ ドリンクは

ポカリか麦茶なら、薄いポカリがええわ。ごつつ薄くな、甘くしたらあかんで。

工藤 ご、ごめんなさい！

梅竹 ……謝られること、何かあった？

山浦 返事やろ！ あんたの告白への返事！

梅竹 山浦さん、黙っといてくれる？！ というか、なんでいるん？

山浦 親友やもん。マネージャー仲間やもん。世話焼きやもん。

工藤 うちな、好きな人がおつて。先輩。いや好きな人どころちやう。付き合ってる！

彼氏！

梅竹 ……ほう。

工藤 それに都築君のことは恋愛対象とちやうっていうか……チェブラーシカみたい

やと思ってる。

梅竹 チェブラーシカ？

工藤 知らんの？！ ロシアの猿の人形。

工藤は鞆の中から、チェブラーシカの人形を出す。

梅竹 ……ほう。

工藤 だから、ごめん！

山浦 ていうか、ちゃんと下調べして告白しなよ。手順があるやろ？ フリーである

ことを確認、友達から外堀を埋めてく。で、告白や。あんた一歩目で蹴躓いて

るやん。血まみれやで！ ガミガミガミガミ……。

梅竹 ほうほうほうほう……。

岡本 梅竹はそれらを右耳から左耳にいなし続けた。そして返す刀で。

梅竹 ええ夢見させてくれて、ありがとう！ お疲れ！

工藤 ……なんで上から？ しかも、ごつつ爽やかやん。

岡本 負け戦であることはとうの昔に分かっていたし、「いかにスマートに、最小限のダメージで負けるか」を考え続けた結果の「ありがとう。お疲れ」であった。

扉の開く音。梅竹は教室を飛び出て、タンクトップとハーフパンツに着替える。

岡本 そして梅竹は、負け犬なりの戦い方を見出すことに集中してきたのである。

岡本、タンクトップとハーフパンツに着替える。

工藤と山浦、ブラックボックスを回しながら。

工藤 その取り組みは髪の毛と同様、長い螺旋を描いて堂々巡りしていたが。

山浦 工藤の尻尾を直視せぬことで、勝利の方程式を見出そうと模索中であった。

町村、ドリブルシュートしながら駆けて来る。

工藤・山浦 町村先輩、ナイツシュー。

岡本 体育館では、ペガサス町村が相変わらず華麗なシュートを決めている。

町村 (梅竹に) ハイタッチだ！ NBAのようにハイタッチしよう！

梅竹 いえ。自分、日本人なんで。

町村 断られちゃった?! まさかのまさか。

町村、はしゃぐ工藤と山浦の間を縫うようにドリブルしてはシュートを決める。

岡本 (笑いながら) 都築、意固地になんたって。

梅竹 岡本、町村先輩には町村先輩の戦い方があり、日陰の僕は僕なりの戦い方をすべきなんや。

岡本 突然、何言うてんの？

梅竹 世界の真理を見た。松竹……完璧であるはずの者の上にも、それを超える者がいて、そんな戦場に迂闊に迷い込んだら、僕は一生負け続けるだけやろ。

岡本 確かに。でも、お前の勝利って一体何や？

梅竹 それが分からん。探してる。

岡本 馬鹿か?!

梅竹 とりあえず今できることは、ハイタッチの拒否や。

岡本 意固地なってるやん。

梅竹 ハイタッチなんかで、日向の人からお零れの光を貰うべきではない！  
岡本 めっちゃ意固地なってるやん！

梅竹 (薄ら笑いで) これからは、修行のような長い禅問答が続くやろな。

工藤・山浦 ところがある日、事態は急変した。

車の停車音。工藤・岡本・山浦・町村、去る。

### 【第十二話 杏子の病】

夕暮れ。竹重と杏子、現れる。

竹重 梅竹、梅竹！ ちょっと来てくれるか？

梅竹、学生服へと着替えながら。

梅竹 な、何ー？ 二人揃って、どないしたん？

杏子 ちょっと話があつてね……。

竹重 (ため息をつく)

梅竹 ……え、え？

竹重、離れ(ブラックボックス)の壁を叩いて。

竹重 松竹。しばらく顔を見んが、元気してるか？ お前も一緒に話を聞いてくれや。

ブラックボックスの影より、イヌが現れる。

イヌ (幾分老いて) それは初めて聞いた、竹の優しい声であった。

竹重 ……お母さんな、おっぱいに癌が見つかったんや。

梅竹 え？ おかん？！

杏子 大丈夫、大丈夫やから。

竹重 (ため息をつき) 幸いそんなに大きいもんどちゃうらしいけど、これからはき  
つい薬を飲まなあかんから、あんまお母さんに面倒かけんなや。(梅竹に) お前  
もやぞ。

竹重は梅竹の頭を撫で、杏子を連れて去る。

イヌ 竹が梅の頭を撫でたのは、記憶する限り、この時が初めてだ。土間に生暖かい風が吹き込むのを、俺は感じていた。

梅竹 ……イヌ、イヌ。

イヌ (舌を出して見る)

梅竹 どないしょ？ 大変なことになってしもた。

イヌ 俺に聞くな。俺は古い先短い、イヌだぞ。

梅竹 心が動かへんねん。おかんの病気を聞いても、一ミリも心が動かん。なんでや？

イヌ 俺のことは？ 俺が死んだら、お前は泣いてくれるのか？

梅竹 やっぱり僕、おかんの息子とちゃうんや……。

梅竹、肩を落として去る。

イヌ 梅、行くな！ 近頃、俺は消えてなくなるのが怖い。暗闇に人知れず、溶けてしまおうで……。

イヌ、力なく土間で横になる。

ブラックボックスの上、傷だらけの松竹が現れる。

松竹 (笑い転げ) それから程なくして、杏子は片方の乳房を切り落とした。

杏子、胸を押さえながら現れる。

松竹 抗癌剤を飲み始めたが、癌が毒なのか薬が毒なのか分からない程、見る見る内に弱り出した。暑い夏の真昼間に。

杏子 さ、寒い。お父さん、毛布を持って来て！

竹重は食卓の椅子と毛布を持って来て、杏子を座らせる。

松竹 しかし、次の瞬間には。

杏子 あ、暑い。お水、頂戴！

竹重は水を飲ませて、団扇で扇ぐ。

松竹 珠のような汗をかき始める。体の変わりように杏子自身、戸惑っているようであつた。

杏子 お父さん。私、どないなってしまうんやろ？



竹重　しばらくの辛抱や。じきによくなくなるさかい。

竹重、杏子の体をマッサージする。

松竹

次第に、杏子は昼間から寝込むことが多くなった。少し前まで綺麗に整えられていた髪には白いものが目立ち、日ごとに抜け毛が激しくなり、頭皮が恥ずかしそうに顔を覗かせる。医者の話では抗癌剤治療は半年も続いたらしい。杏子は、半年も戦い続けられるのだろうか？　でその時、竹重は……（笑い）俺の勝ちや。

松竹、去る。離れの扉が閉まる音。

### 【第十三話　冬の事件】

イヌ、震えあがって起き上がる。

イヌ

冬が始まった。俺に飯を届けるのは梅の仕事になり、竹が仕事から戻ってくるまで、杏に薬を飲ませるのも梅の仕事になっているようだ。

竹重は去り、冬服の学ラン姿になった梅竹がお盆に水を乗せて現れる。

梅竹

……おかん。おかん、寝てるんか？　薬の時間やぞ。

ニット帽を被った杏子、毛布を被って鼻をかき眠っている。

イヌ

人目を気にせず無用心に眠りこける杏。見慣れていない梅は立ちすくみ、このような姿は本当の家族しか見てはいけなと思った。

梅竹

こ、ここに置いとくな。忘れず飲みや。

梅竹は盆を置き、立ち去ろうとする。杏子のニット帽が落ちる。

梅竹

（杏子の頭を見て）あ、あれ？　あれれ？！　うわあああああ！

杏子

（起きて）……何、じろじろ見てんのよ？

イヌ、力なく横になる。

梅竹 だって、おかんの髪。髪が……。

杏子 どないしたん？

梅竹 新しく生え出した、おかんの髪が！

杏子 だから、どないしたん？ 大声出して。

梅竹 曲がってる！ ち、縮れてる！ 真っ直ぐに生えることのでけへん、どっかで

見覚えのある毛や！

杏子 (笑って) あんたにそっくりやろ？ お母さんかって嫌で、隠し続けてきたん

やから。

梅竹 ぱーどうん？！

杏子 ストレートパーマ当てて、お風呂上りにドライヤーで必死に伸ばしてきたけど、

今だけのご愛嬌。勘弁して。

梅竹 ……そうか、そうやったんか。

ブラックボックスの隙間から、光が漏れ出す。

梅竹 僕の心に長い間、沈み込んでいた黒い鉛が溶け出した！ 僕の体がふわふわと

宙に浮かび上がりそうや。あかん、大蛇が現れる！

激流の音。

梅竹 これは、恥の大蛇や！ 罪の大蛇や！

竹重が現れ、ブラックボックスを回し出す。

竹重 大蛇が心の堤防にぶつかり続ける。居ても立ってもいられず、梅竹は居間を飛

び出した。

梅竹、ブラックボックスの裏へ駆け出す。

梅竹・竹重 何処へ向かうべきなのか？ 誰にこの感情を吐き出すべきなのか？

竹重 勝手口を開けると、土間へ駆け下りた。

勝手口の開く音。梅竹、イヌの元へ現れる。

竹重と杏子は消え、ブラックボックスは止まる。

イヌ (飛び起きて) けたたましい足音がした！ 視界は霞んで、もはや夢か現かも

分からないが、梅の顔を見ると安心した。飯の時間か？

梅竹、拳を握り締めている。

イヌ どうした？ 飯の器が無いぞ。

突然、梅竹はイヌの首を掴む。

イヌ 梅は俺の首を、厳密に言う俺の首に巻きつけられているベルトに手を回した。

梅竹 イヌ、行くぞ！

イヌ 行く？ 行くなって、どこにだ？！

梅竹 さあ、行くんや！

梅竹、イヌを引っ張り出そうとする。

イヌ や、やめろ！ 途端、俺は怖くなり前足をつんと伸ばした。

梅竹 抵抗すんなって。行くぞ！ (引っ張る)

イヌ (引っ張り返し) 嫌だ！ 俺はどこにも行かない。行けない！

梅竹 行くんだよ。僕について来い！ (引っ張る)

イヌ 暗闇の綱引き大会はしばらく続いたが、ついに俺は梅の若さに根負けしてしま  
った。

イヌ、舌を出して座る。梅竹、くしゃと笑って。

梅竹 よし、いい子だ。イヌ、僕と一緒に出よう。

イヌ 出る……何処から何処へ？ もうその言葉の意味を忘れてしまった。

松竹・竹重・杏子が現れ、光が漏れるブラックボックスを回し始める。

梅竹はイヌを引っ張って、ブラックボックスを上っていく。

松竹・竹重・杏子 いつもの暗闇を抜けると、ありったけの光に包み込まれた。痛い程の

光線は一瞬イヌの視力を完全に奪ったが、光のトンネルを抜けると、  
強い日差しで体は熱くなり、燃え出すような感覚を感じていた。

梅竹とイヌ、ブラックボックスの上へ。イヌ、舌を出し「ハーハー」と息を吐く。

松竹・竹重・杏子 舌を出す！ 体温を必死に下げる！ 呼吸が荒い！ 心臓がバクバク音を立てて、悲鳴を上げている！ 懐かしい匂い！ 日向に慣れない視界の先で白い霞が晴れ、深い緑の蜃気楼が広がっていく！

松竹・竹重・杏子が去ると、ブラックボックスは止まる。  
鳥の声。ブラックボックスの上には、懐かしい日差しが差し込んでいる。

イヌ 土の匂い。太陽を浴びた草花の匂い。俺の鼻はこの匂いを知ってる。母の匂い。そう、俺はこの林で生まれ育った。故郷と土間がこんなに近いものだったとは……自分の小ささを思い知って、なんだか恥ずかしくなった。

梅竹、イヌの首輪を外そうとする。

イヌ な、何をする！ 梅、やめるんだ！

梅竹は首輪を一気に外し、投げ捨てる。

イヌ 突然、呼吸が楽になった。(息を吸う) 腹一杯に空気が流れ込む。う、美味い。  
梅竹 (深呼吸している)

イヌ ……母の顔を思い出した。初めて息を吸った日、俺の目前には母の顔があった。無条件なその優しさに触れ、生きる喜びを知り、すぐに四本足で立ち上がるこゝとが出来た。今まで恨み続けた記憶の全てが、馬鹿げた過去の話に変わっていく。浮かび上がるような錯覚を覚えた。梅も隣でふわふわ浮いているようだ。

梅竹、イヌに向かって姿勢を正して。

梅竹 さあ、行けよ。

イヌ え……？

梅竹 行くんや。どこまでも走っていけ。

イヌ 梅？！

梅竹 イヌ、バイバイ。

梅竹は行こうとするが、イヌは足にしがみつく。

イヌ 待ってくれ！ お前と離れたら、俺は一人ぼっちになっちゃう。

梅竹 イヌ、バイバイやって。

イヌ　い、嫌だ！　置いてかないでくれ。頼む！  
梅竹　バイバイ！

梅竹はイヌを手で突き放そうとするが、イヌは抵抗して力一杯嘔む。

梅竹　い、痛ってえ！

イヌ　俺を閉じ込めたのはお前等ではないか！　今更、何処に行けという？　俺にも誇りがある。今暗闇から逃げ出せば、暗闇で生きた今までの人生を否定することになる。俺は土間で、お前等の行く末を見張り続けると決めたんだ。

梅竹、手を押さえて蹲っている。

イヌ　…：梅、ごめん。傷付けるつもりはなかったんだ。

梅竹　（手を見つめ）そうか、お前も男や。意地を張りたい時もあるよな？

イヌ　男…：違う。俺はイヌで、断じて。

梅竹　ほんで、僕の家族や。

梅竹、イヌを抱き締める。

イヌ　…：梅、体が熱い。胸が苦しい。生きたいよ。

梅竹はイヌの体を解くと、くしゃと笑って。

梅竹　イヌ、元気だな。ありがとう。

梅竹、ブラックボックスを下りて消えていく。

イヌ　礼なんかいらない！　だから、置いていくな！　俺は寂しい、梅！

イヌ、その場で崩れ落ちる。犬の遠吠えの声。

#### 【第十四話 家族】

ブラックボックスの裏より、梅竹が駆け現れる。

梅竹　鼻息荒く「都築家」の玄関に駆け戻ると、見慣れない靴がきちんと並べてあつ

た。嫌な予感がした。

食卓の椅子に杏子、その傍らに竹重と白衣姿の男（町医者）がいる。  
杏子、「ゼーゼー」と荒い息を吐き出している。

竹重 梅竹、どこ行つとつたんや？ 突然、お母さん、高熱で苦しみ出してやな。

梅竹 ……目をキョロキョロ泳がせ、竹重は酷く動揺してるようやった。

町医者 （脈を図っていたが）あ、あかん。すぐに救急車呼ばんと！

町医者、駆け去る。ブラックボックスが回ると、イヌの姿は消える。

竹重 せ、先生！ 杏子の容態はどうなんです？！

竹重、町医者を追い駆け去る。杏子、呻き声を漏らして苦しんでいる。

梅竹 ……おかん……おかん……お母さん。

梅竹、杏子の周囲を歩き続ける。

梅竹 今、必要な言葉が見つからん。今、必要な……何をすればええ？！

梅竹は立ち止まると、土間に向かって駆け出す。勝手口の開く音。

梅竹 主のいなくなった土間は、ガランと間の抜けた空間になっていた。母屋と離れを遮っていた重い空気が消えていることに気が付いた。

梅竹、離れの扉の前に立つ。

梅竹 （髪を掻き毟り）ぼ、僕も男やろ！ 僕がやらんと、僕が……。

梅竹、土間と離れの前を行ったり来たりする。救急車の音。

梅竹 おかんを迎えに来た音や！ さっきまでガアガアと軀をかいていた、おかん。

「あんたにそっくりやろ？」と笑い飛ばしてくれた、お母さん。たった一枚の扉を隔てて、松竹は全て知らずにいる。

梅竹、拳を見つめて立つ。杏子の姿は消える。

梅竹　　イヌの運命を変えたこの手には、家族の運命を変える力が宿っているはずや。

梅竹、強く扉を叩く。

梅竹　　松竹―！ 松竹―！

梅竹、扉を叩き続ける。

梅竹　　松竹、出て来い！　ほんまにこのままでええんか？　おかんが死んでまうぞ！

扉からの返答はない。

梅竹　　意地張んなって。そんなゴミみたいな意地捨ててまえ！　今出てこんど、絶対後悔すんぞ！　お前のお母さんやろ！　兄ちゃん、兄ちゃん！

勢いよく扉が開くと、梅竹は顔面を打って倒れ込む。

梅竹　　（鼻を押さえて）い、痛てててえ……。

松竹、梅竹の目前に現れる。

松竹　　……アホ。お前、うるさいねん。

梅竹　　松竹……。

松竹　　正義のヒーローにでもなったつもりか？　お前なんか言われんでも、行くつもりだったんじや。俺は！

松竹、ブラックボックスの裏へ駆け出す。

松竹　　おかん、おかん！　俺のおかんはどこや？！

梅竹　　兄ちゃん！　おかん！

梅竹、松竹を追い駆ける。「おかん」と呼び掛ける松竹・梅竹の声。

竹重・町医者・救急隊員2名、杏子に乗せたストレッチャーを運んで現れる。

松竹 (現れ) おかん！ おかん、俺や。松竹が来たぞ！

竹重、松竹の前に歩み寄る。

竹重 ……松竹。何や、こんな時に？ 邪魔すんな！

竹重、松竹の胸倉を掴む。鼻血を流した梅竹、駆けて来る。

梅竹 松竹？！ おとん？ こんな時に何してんねん！

松竹、崩れるように土下座をする。

松竹 ……ごめん。ごめんない。堪忍して下さい……だから。

松竹はストレッチャーににじり寄り、毛布を掴んで。

松竹 おかん、死ぬな！ おかん、死なんといて！

松竹、大声を漏らして泣き出す。

梅竹 ……僕の想像を遥かに超えた勢いで、松竹は離れの扉を打ち壊した。

松竹 ほんま頼むわ。俺、もうええ子にするから！ だから、死なんといて！

梅竹 理解できずに戸惑う救急隊員を置き去りに、嗚咽を漏らして泣き続ける松竹。  
鼻血を垂らして動けん僕をよそに。

竹重、ストレッチャーの上で眠る杏子に駆け寄って。

竹重 そうや、松竹の言うとおりや！ 杏子、癌なんかになんか負けんな！

梅竹 ……竹重の窪んだ瞳は、どんどん湿っていった。

竹重 俺がおるぞ！ 松竹がおるぞ！ 杏子、しっかりせい！

梅竹 ふいにキャッチボールの時のような孤独に襲われたが……。

泣いている松竹と竹重の間を割って、梅竹は杏子に駆け寄る。

梅竹 僕かって、死ぬなんて許さへんぞ！ おかん、絶対に死ぬな！

町医者・救急隊員 途端、梅竹の涙腺が決壊した。



梅竹、大声で泣き出す。

町医者・救急隊員 恥の大蛇と罪の大蛇が絡まり合って、心の壁を越えていく。

激流の音。

町医者・救急隊員 濁った水が、一気に外へ流れ出した。

ブラックボックスから光が溢れ出す。

町医者・救急隊員 玄関先で、家族の壁を乗り越えた男たちの涙が溢れ続ける。嗚咽と鼻水を啜る音が、隣の家壁に当たってこだまする。氾濫を堰き止めたのは、中心にいた杏子であった。

杏子、毛布を剥いで起き上がる。

杏子 死なへんよ。こんなあんたら残して、死ねるわけないやん。

松竹 ……おかん？

竹重 杏子。

梅竹 お母さん！

杏子、顔をくしゃくしゃにして笑う。梅竹・松竹・竹重、つられて笑い出す。

梅竹 笑いの種や。笑いの種が浮かび上がった！

松竹・竹重・杏子 はあ？

家族4人、笑い続ける。

町医者・救急隊員 都築家に横たわっていた重く冷たい空気が、笑い声で浮かび上がり、

屋根の上に「家族」という文字を描いた。

イヌ、ゆっくりとブラックボックスを回しながら現れる。

ブラックボックスには、大きく「家族」と殴り書きされている。

町医者 は、早く病院へ！

町医者と救急隊員、杏子に乗せたストレッチャーを運んでいく。

松竹 おかん、頑張れよ！

竹重 杏子、俺がついとるからな！

松竹と竹重、ストレッチャーに声援を送りながら追い駆けようとするが。

松竹 (立ち止まって) 石段の途中、茶色い毛むくじやらの物体が横たわっていた。

竹重 日差しの下で見ると、余りにも汚らしく、今の都築家には相応しくないように思えた。

松竹と竹重、ストレッチャーを追い駆け去る。

梅竹 イヌ、なんで帰ってきたんや？

イヌ ……。

梅竹 おかん、大丈夫や。僕が死なさへんぞ。

梅竹は男前に笑って、ストレッチャーを追い駆け去る。

### 【第十五話 イヌの最後】

イヌ、力の入らぬ体をゆっくり起こして。

イヌ 俺の知る限り、この屋敷の住人たちは最低だ。結局は自分のことだけに夢中で、自分を可愛がり満足してしまう。他人のことなど、最後は頭の片隅にも置いて残さない。俺はまた母のことを思い出していた。愛し育ててくれた母は、何故俺を置いていったんだ？ 答えのない空しい問い掛けなので、それが生きる苦悩だと悟って納得することにした。母も母とて、何らかの鎖に繋がれ、閉じ込められた自分を解放するために、何処へと向かわざるを得なかったのだろう。

イヌ、土間に座り込む。

イヌ 力の抜けた俺は、ゆっくり目を閉じた。やっぱり暗闇だ。俺の居場所が暗闇であることに間違いないようだ……梅は、土間を抜け出すことに成功したか？

俺と同じように居場所が見つからず、暗闇に戻る破目にならないことを祈るだ

けだ。少なくとも、今の梅は日陰に灯る炎だから。

懐かしい日差しが差し込んでくる。

イヌ   瞼の裏側に、あの日の雑木林の木漏れ日が広がり始めると、母が「おいで」と手招きして呼んでいる。そこに行けば母と暮らせるのか？　そこは俺にも陽が当たる場所なのか？

イヌ、ゆっくりと目を開ける。

イヌ   長年眺め続けた愛着のある土間。トタン屋根。飯の残った皿。(息を大きく吐く) 脳裏にしっかりと焼き付けると、眠りにつく。梅の声が聞こえた。

梅竹の声   イヌ、なんで帰ってきたんや？

イヌ   愚かな住人たちめ、お前らが閉じ込めたんだよ。暗くても、惨めでも、此処は俺の家だ。

イヌ、ぐったりと横たわる。

## 【第十六話 春】

体育館の喧騒音。工藤と山浦、ブラックボックスを回しながら現れる。

ブラックボックスの上、タンクトップと-halfパンツ姿の梅竹が立っている。

梅竹、髪を短く刈り上げている。

工藤・山浦   春。

山浦   威勢のいい声が飛び交う体育館に、縮れ髪を短く刈った梅竹が立っていた。

工藤   相変わらず華奢な体ぶかぶかのタンクトップを被せているが、これまでの梅竹選手とは全くの別人である。

梅竹   扉越しに兄に噛み付いたあの日、僕は余りにも無駄な年月を過ごしていたことに気が付いた！

梅竹がブラックボックスから下りると、バスケットボールが転がってくる。

イヌの姿は消えている。

梅竹、ボールを拾ってドリブルをしながら。

梅竹   二度と無い青春の日々で、陽の当たる人を妬むこと、日陰の己を恥じること、

そんな螺旋をぐるぐる回り続けることとは、もうおさらばや。

工藤・山浦　だから縮れ髪をばっさり切り、梅竹は生まれ変わったのである。

梅竹　全ての男は恐れるに足らず、結局はただの男や。松竹の扉を打ち鳴らした勇氣、それさえあればどんな深い谷でも飛び越えられる！

工藤・山浦　梅竹は長い「都築家の戦い」で学んだのだ。

笛の音。タンクトップ姿の岡本、駆けて来る。

梅竹、岡本にボールをパスする。

岡本　三年生との引退試合が始まった。バスケットボール部では、卒業間近の三年生と二年生の間で試合を行うことが恒例となっている。

ユニフォーム姿の町村、現れる。

町村　梅竹がコートの隅に目をやると、工藤が山浦と試合を観戦しに来ていた。

梅竹　きつと、工藤は町村先輩を応援しに来たんやろう。

岡本　しかし、梅竹にとってそれはもはや問題ではない。

梅竹　誰の応援であれ、工藤がこの決戦の場に立ち会っていることで、僕の勝負は公式なものとなる！

町村は岡本からボールを奪い、ゴールを決める。

工藤・山浦　町村先輩、ナイツシュー。

町村、工藤とハイタッチする。

岡本　いつになく張り切った町村先輩が、華麗にシュートを決めハイタッチしている。

梅竹　工藤も手を叩いて喜んでるようだ。

山浦　一瞬、梅竹の頭に「嫉妬」という二文字がよぎったが。

梅竹　へ、平常心！

岡本　そう言い聞かせると、獲物を狙うハイエナの如き駆け足でボールを追い駆けた。

梅竹は雄叫びを上げて、ドリブルする町村を追い駆ける。

岡本　都築、深追いすんな！ゾーンディフェンスや！

町村・梅竹・岡本、ブラックボックスの裏へ消えていく。

工藤と山浦、ブラックボックスを回しながら。

工藤 杏子は片方の乳房を失ったものの、結局生き長らえ、もう化粧と白髪染めを始めていた。

杏子・山浦 髪がまだ伸びきっておらず、梅竹とお揃いの縮れ毛だ。

ブラックボックスの中、離れの風景。杏子、部屋を片付けながら。

杏子 松竹、片付けなさい！ あんた、20歳超えたええ大人でしょ！

扉の開く音。松竹、現れる。

工藤 松竹は新しい女を作って、離れで一緒に暮らし始めていた。

C子（※山浦と同じ役者が演じること）が現れ、松竹の傍へ。

松竹 （杏子に）勝手に俺の家に入んたって！（チェッカーズ「ジュリアに傷心」を口ずさむ）

工藤 チェッカーズの「ジュリアに傷心」を歌いながら。

松竹 （チェッカーズ「ジュリアに傷心」のサビを叫ぶ）

C子 あたし、ジュリアとちやうで。

ブラックボックスの上、梅竹が現れる。

梅竹 それが自立だと、都築家のスターたる自己中心的な主張を繰り返す松竹であったが、甚だ疑問である。

工藤 離れには、台所も洗濯機も風呂も無い。

梅竹 結局、松竹は生きる全てを杏子と竹重に依存しているのだ。

松竹 はい、賠償金。金、よこさんかい！

杏子 何で？！ 片付けてあげたのに。

松竹、杏子の財布を奪おうとする。

C子、リコーダーで競馬G1レースのファンファーレ演奏。

梅竹 相変わらず小競り合いを繰り返しているが、松竹が暴れ馬に化けることは稀に

なっただので、十分満足や。

竹重、駆けて来る。

竹重 松竹、ええ加減にさらせ！ 表、出んか！

松竹は杏子を突き飛ばし、離れの扉を閉める。

工藤 竹重に女がいるという話は、本当だったのだろうか？

梅竹 兄の虚言やと思ひ込むことにした。父の浮気話を鵜呑みにして、また土間に戻るわけにはいかない！

松竹・C子 そう、今の梅竹にはやるべきことが残されているのだ。

体育館の喧騒音。梅竹がブラックボックスから下りると、岡本が現れる。

工藤はブラックボックスを回し、竹重と杏子は去る。

梅竹 岡本が三年生のディフェンスを掻い潜り、ゴールを決めた。

岡本はシュートを決めてガッツポーズすると、梅竹に駆け寄る。

岡本 真理ちゃんが来とるで。都築もそろそろゴール決めんとな。

梅竹 お、おう。

岡本 おうって。(笑い) お前、二年間で一度もゴール決めたことないのに！

梅竹 今日こそ任せとけ！ 僕にパス回してや。

岡本 あれ、落ち込まへんの？

工藤 今の梅竹には、岡本の悪ふざけに付き合ってる暇など無いのだ。

梅竹 岡本、速攻！ 走れ、走れ！

岡本 (首を傾げて) 調子狂うわ！

岡本、ドリブルしながら駆け去る。

梅竹 (岡本を見送り) イヌが死んだ時も、僕はこうしてボールを追い駆けてた。

ブラックボックスの影から、山浦が現れる。

山浦 イヌの死体は、竹重と杏子の手によって町の火葬場へ運ばれたらしい。

竹重と杏子、現れる。竹重の手にイヌの遺影、杏子の手に野花がある。

竹重 その日は晴天で、天竺川の川底にはやはり濁った水が溜まり、傍の雑木林では土と草花の匂いが沸き立っていた。

杏子 ……最後に綺麗な花を一輪摘み取って一緒に燃やしたから、イヌもきっと成仏してると思うわ。

梅竹 僕は、風呂を焚く時にいつも炎を見ていたイヌを思い出した。

炎の燃える音。梅竹の顔、赤く照らされる。

梅竹 イヌの一生とは結局何やったんや？ イヌは何を残すことが出来たんやろう？  
僕がボールを追い駆ける時、工藤の尻尾を思い出すことはあってもイヌの尻尾を思い出すことはなかった！

岡本、ドリブルをしながら現れる。

岡本 都築、ぼうつとすんな！

岡本、強いパスを梅竹に投げつける。

岡本 お前にやれるもんなら、やってみい！

梅竹 サンキュー。やったる！

梅竹、ドリブルを始める。

工藤・山浦 梅竹は、三年生のゴール目掛けてドリブルで突き進む。

竹重・杏子 すぐさま、三年生のディフェンスが梅竹を取り囲む。

竹重・杏子・工藤・山浦、梅竹を取り囲むように歩き続ける。

梅竹 (ドリブルしながら) 僕には、彼らを突破できるスピードもテクニクもない。

岡本 都築、こつちや！ ボールよこせ！

梅竹 そんなこと重々承知してるで、僕は。

竹重・杏子 梅竹は、突然歯をむくと。

工藤・山浦 彼らに噛み付かんばかりの大声で。

梅竹 (ドリブルを止め) ワンワン! ワンワン!

工藤・山浦・竹重・杏子 と、吠えた!

岡本 突然の奇行に、一瞬怯んだ三年生の足がすくむ。

梅竹 ヒヒーン!

工藤・山浦 梅竹は大きく嘶くと。

竹重・杏子 彼らの隙間を駆け抜けていった。

梅竹、ドリブルですり抜ける。

岡本 (笛を吹き) ダブルドリブル!

梅竹 え? (ボールを持って岡本に駆け寄り) そんなん知るか!

岡本 (笛を吹き) トラベリング!

梅竹 何人たりとも、僕の戦いは止められん!

梅竹、力強くドリブルを始める。

竹重・杏子 水銀灯に照らされた工藤の。

工藤 (リバーブ深く) 都築君、すごいやん!

山浦 という、透き通った声が聞こえてきそうだ。

梅竹 あかんあかん、平常心!

竹重・杏子 梅竹は、ゴールに視線を戻す。

工藤・山浦 ゴール下では、町村先輩が両手を広げて待ち構えている。

ブラックボックスの上、町村(松竹)が現れる。

松竹の頭上には、強い光が差し込んでいる。

松竹 さあ、都築。来い!

梅竹 恐れるな、恐れるな、恐れるな。僕は、日陰に咲く野花や!

岡本 梅竹の頭の中で。

竹重・杏子 天竺川の大蛇が、天翔る龍となって上空に舞い上がる。

工藤・山浦 梅竹は町村先輩の目前で大きく腰を屈め、思いつ切り飛び立った!

突然、スローモーションの世界へ。

梅竹は人垣を登って、松竹と町村、その光の先へ向かっていく。

梅竹 僕は龍になり、ペガサスを噛み殺す!



梅竹、ありったけの力で咆哮する。人垣は「心の声」を発する。

心の声 それは負け犬の意地の雄叫び、人生の苦悩を突き破る怒号、光へ向かう臆病者

たちへの号令であった。

松竹 お前、同じ過ちを繰り返す気か？

梅竹 勘違いすんな。この光は、僕の心を照らす光や。真っ直ぐ、真っ直ぐに伸びる

ための！

松竹の両手、梅竹のボールを掴む。

心の声 町村先輩の手が、梅竹のボールに覆い被さる。

梅竹と松竹、咆哮する。

心の声 梅竹は尚もゴールに向かってボールを放り投げようとする。しかし空中で体勢

を崩し、梅竹は陸に飛び出たドジョウのような格好のまま地面に激突した。

梅竹が人垣から崩れ落ちると、スローモーションは解かれる。

体育館の喧騒音。工藤と山浦の悲鳴。岡本、梅竹に駆け寄る。

岡本 都築、大丈夫か？！

梅竹、ゆっくりと体を起こす。額が割れ、頭から血が流れ出している。

岡本 ち、血が、めっちゃ出てる！

山浦は悲鳴を上げ、工藤は気絶する。

岡本 おい、マネージャー！

工藤 (意識を取り戻し) き、救急車。呼んで来るな！

工藤・山浦・岡本、駆け去る。梅竹の頭上、月明かりが差し込む。

梅竹 ……水銀灯がまるで月明かりのように、ぼんやり頭上を照らしている。

梅竹は手で血を拭い、見つめる。

梅竹 突然の自我の目覚めは、僕にどす黒い血の存在を感じさせた。

竹重 俺の血や。

杏子 私血。

松竹 多くの先人たちの血やな。

梅竹 うん、半分は。じゃあ、残りの半分は何やと思う？

竹重と杏子はブラックボックスを回しながら去り、松竹は消える。

梅竹 僕の血や。僕だけの血。他の誰も持ってへん、ドロドロとした生きてる証。

光が差し込むブラックボックスの中、イヌが座っている。

イヌ 梅、俺がいるぞ。お前の中には、俺がいる。

梅竹 ……分かってる。

イヌ もう一度、立ち上がれ。まだ走れるか？

梅竹、ふらつきながらも立つ。

梅竹 当たり前や。まだまだ走れる。

イヌ ……泣くなよ。もう泣くな。

梅竹 泣くか。僕は、都築梅竹やぞ！

梅竹、ゆっくりドリブルを始める。

松竹・竹重・杏子・工藤・岡本・山浦、現れる。

一同 梅竹は、コートに戻ろうと歩き出す。そんな傷だらけの梅竹の後に、血の雫がまるでイヌの足跡のように連なっていた。

梅竹、バスケットボールをパスする。

一同、お互いを理解するように、人生の苦悩を共有するようにパスを繰り返す。いつしか皆の顔には、笑顔が浮かび上がっている。

終劇。